

公益社団法人 私立大学情報教育協会
平成25年度 第2回産学連携推進プロジェクト委員会議事概要

- I. 日 時：平成25年10月2日（水）午後1時30分～午後3時30分
- II. 場 所：アルカディア市ヶ谷 私学会館 会議室（7F）
- III. 参加者：向殿委員長、大原副委員長、東村委員、田辺委員、白崎委員、辻村委員、松本委員、
齋藤アドバイザー、吉永アドバイザー、青山アドバイザー、名原アドバイザー（青山氏後任）、山本アドバイザー、木下
アドバイザー、和田アドバイザー
井端事務局長、森下、坂下
- IV. 資 料： 1. 平成25年9月実施 大学教員の企業現場研修の報告書（ニッセイコム・日立製作所）
2. 未来を切り拓く「志」を支援する社会スタディの参加募集
3. 第5回 産学連携人材ニーズ交流会の企画について
3. 1 実践的ICT人材育成推進委員会資料
（今後育成が望まれる実践的ICT人材像とその育成に向けて産学官に期待される取組について）
3. 2 評価基準活用ガイド（案）概要（文部科学省・経済産業省資料）
3. 3 情報技術人材育成のための実践教育ネットワーク形成事業（文部科学省資料）

V. 検討内容

前回欠席した委員・新アドバイザーの自己紹介と後任者の自己紹介を行い議事に入った。

1. 平成25年9月実施の大学教員の企業現場研修の報告について

(1) 事務局から平成25年9月に実施した2社の「大学教員の企業現場研修」について報告

（株）ニッセイコムの現場研修：14名参加

- ・ ニッセイコムの事業領域、システムインテグレータの現場実態見学、システム構築事例の紹介、若手社員との意見交流などプログラムの概要説明。
- ・ 参加者の感想として、難易度は普通（64%）、他の教員に紹介したい（100%）、授業で役立つ（100%）との報告があった。
- ・ 講義で自信を持って話せる、若手社員の発表を聴き学生の成長イメージが持てた、コミュニケーション能力についての議論が有益だったなどの感想が寄せられた。

（株）日立製作所の現場研修：28名参加

- ・ 日立の事業領域、最先端ICT活用事例、求める社員像と社員教育、大学教育とのマッチング、若手社員との意見交流などプログラムの概要説明。
- ・ 参加者の感想として、難易度は普通（88%）、他の教員に紹介したい（96%）、授業で役立つことがあった（92%）との報告があった。
- ・ 日本を代表する大手ITメーカーの課題と将来の捉え方やビッグデータ等最先端ICT技術の活用事例、企業が求める人材像、若手社員との意見交流などの内容が講義の現場で役立つ。
- ・ 最先端ICT活用事例やビジネス顕微鏡、ビッグデータとの向き合い方などアレンジしてゼミや授業で活用できる。
- ・ 事務局の反省として、賛助企業と私情協の事前摺合せが不十分な点もあり、偏った選抜による若手社員の発表は必ずしも満足いくものでなかった。発表者が国立系卒の人に偏っていたり、ベテランで10年目の人もいた。狙いは大学の教育がマッチングできているかどうかを知る目的であったので平均値の人材を知りたかった。来年3月の実施に向けて入念な準備をしていく。

(2) 主な意見

- ・ 1日の企業現場研修をインターンシップとは言わないので訂正した方が良い。

- ・ 今回の企業現場研修で協力いただいた企業として事前準備、工数などどれくらい労力がかかっているか、わかると今後の企業依頼時に役立つという意見に対し、賛助企業よりプログラム検討に約3ヶ月前より準備、人選で約1ヶ月弱期間を要したとの報告。
- ・ 大手企業のみならず中小規模（50名～100）位の企業研修も希望するとの意見に対し、私情協として中小との接点がないため委員の方々に積極的な紹介を要請。
- ・ 私情協としてはこの事業をいつまでも継続するのではなく、あくまで先生に気づきを持っていただくことのきっかけづくりが目的。

2. 社会スタディの場の進め方について

- (1) 実施計画について資料2に基づき募集対象、応募方法、応募締切り、参加者の確定、応募先URL、開催日時・場所、有識者の説明と意見交流、プログラムの進め方などについて検討した。テーマは「**未来を切り拓く「志」を支援する社会スタディ**」の参加募集とする。

1. 参加対象

- ・ 国・公・私立大学の1年生、2年生（150名程度）

2. 応募方法

- ・ 「あなたは未来社会にどのように向き合いたいと思いますか」のテーマで小論文（360～400文字）を提出いただき、事前審査にて参加者を決定する。

3. 応募締切

- ・ 平成25年12月15日

4. 参加者の確定

- ・ 小論文を審査し、平成26年1月20日頃に選考結果をメールで連絡する。
参加者申込みURL
・ <http://www.juce.jp/sangaku/syakai-study>

5. 開催日時・場所

- ・ 平成26年2月〇〇日 午後1時30分～午後5時
株式会社ディスコ 神楽坂 HCスタジオ 東京都新宿区下宮比町2-12
JR「飯田橋」駅東口より徒歩5分 東京メトロ有楽町線・東西線・南北線「飯田橋」駅B1出口より徒歩3分

6. 有識者の説明と意見交流

① 新たな価値創造に向けたインフラとしての情報通信技術（ICT）	産業技術総合研究所最高顧問 野間口 有 氏
② 地球規模の生活インフラづくりに挑戦	LINE株式会社 代表取締役社長 森川 亮 氏
③ イノベーションに求められる学び	東京大学大学院 情報学環長 教授 須藤 修 氏
④ 若者はグローバル時代にどう対処すべきか	慶應義塾大学 環境情報学部長 村井 純 氏

7. プログラムの進め方

- ・ 有識者の講演を聞くのみでなく学生に未来を切り拓くことの重要性の理解と、自らがどのように関わらべきかを考えさせる場にする。そのため、プログラムは以下のように進める。
- ・ 各有識者から映像情報を交えて20分程度の説明や質疑応答を行い、クリッカーで確認しながら理解が十分でない部分については補足説明を行う。
- ・ 参加者は、3名一組のグループで「社会的課題を解決するためにICTを活用した将来をイメージして未来を自ら切り拓く取り組み」について意見をまとめる。

- ・ スタディ修了後もネット等を通じてグループで議論し、学びの成果物を各自作成、2週間以内にWebサイトに報告してもらう。
- ・ 報告された成果物を審査し3月末頃修了証を郵送する。なお、優れた内容については、後日「優秀証」を郵送する。

(2) 主な意見

- ・ 冒頭の文書で「経済・財政の低迷、少子高齢化・・・」に対し、日本は今低迷から脱しようとしているのであまり相応しくないのでは。との意見に対しこれを経済・財政の健全化に変更する。また、1. 参加対象を募集対象に訂正、5. 参加者申込みURLは応募先URLに訂正する。
- ・ 参加募集の表現で前半では幅広い募集になっているが、後半からICTの話が中心となっており学生により参加したがついていけなくなる心配も予想される。前半にもICT表現を入れた方が良いのでは。
- ・ 社会スタディ本来の目的はICTの重要性に気づいてもらうこと。呼びかけではICTを先に出さずオープンイノベーションするときにICTがかかわってくることを知っていただきICTに関心を持ってもらう。小論文のテーマにICTを入れていないが講演内容ではICTの力を使ってイノベーションするためのプログラムにしてあり、ICTが関わっていることを知り関心を持っていただくことが重要。
- ・ 事務局より、8.②の「ICTを活用した・・・」の文章を「社会的課題を解決するためにICTを活用した将来をイメージして未来を自ら切り拓く取り組み」に表現の訂正があった。
- ・ 8.③「高度なICTサービス」の表現が分かりづらいとの意見に対し、「高度なICTの提供が日本経済の活力につながる」と訂正する。
- ・ 講演者4名の参加の可能性は？の質問に対し、概略了解頂いているが、正式日程は10月半ば過ぎでないと判明しない。決まり次第日程調整する。
- ・ 審査方法は委員の先生方に審査いただくとの説明に対し、先生からはスケジュールを早く提示要の要請。
- ・ 会場は飯田橋にある(株)ディスコのスタジオで開催予定をしており、下見でロケーション、設備など確認済みである。また、ディスコから大学生の登録者35万人に直接メールにて告知が可能。会場費は今回に限り無料。
- ・ 最終報告について1グループ3名で討議するが、レポート提出は各個人とする。その優秀者には「優秀証」を発行しレポート提出者には修了証を発行する。
- ・ 社会スタディ終了後と終了証の表現は「修了」に訂正する。
- ・ 参加者を募るチラシは各大学に郵送し募集するが、委員の先生方にも学生誘致協力のため配布する。国立大学も含め幅広く公募する。

3. 平成25年度「第5回産学連携人材ニーズ交流会」の進め方について

(1) 事務局より「第5回産学連携人材ニーズ交流会の企画について」資料3の説明があった。

人材ニーズ交流会の方針、経緯は先回の説明で概略了解いただいたものとし、今回は前回十分討議できなかった内容について討議した。開催日程：平成26年3月5日（水）13：30-17：00（ニーズ交流会）
17：30-19：00（情報交換会）開催場所：新宿住友ホール。

- ① 13：40～平成25年度から総務省の事業としてスタートした「今後育成が望まれる実践的ICT人材像とその育成に向けた産・学・官連携の取り組み」について慶應義塾大学 常任理事 國領二郎氏より基調講演をいただく。
- ② 14：20～オープンイノベーションの教育取り組み事例を一つ選定し紹介と討議を行う。（慶應義塾大学か八戸大学）
- ③ 15：30～大学教育に対する卒業生の反応について大学教員の企業現場研修協力企業の若手社員（入社3年程度）から大学教育に対する率直な感想や意見・体験を披歴いただき大学教育の改善に向けた意見交流を行う。

- ④ 16:20 ～ 述べ6回開催した「大学教員の企業現場研修」の取り組み報告を行い受入先の企業から提案いただく。
- ⑤ 16:30 ～ 学生を対象とした連携事業「社会スタディの場」の取り組み報告では2月に実施した内容の報告と次年度に向けた取り組みを協議する。
- ⑥ 16:50 ～ 産学連携教育の実践的評価基準活用ガイドについてIPAより紹介いただく。
- ⑦ 17:00 閉会
- ・ また、事務局より総務省の資料の産業界が求めるICT人材像の移り変わり、実践的ICT人材の3類型、人材育成の方向性、先進的取り組み事例（慶應義塾大学、八戸大学等）などについて補足説明があった。
 - ▶ 事務局より資料3.1、3.2、3.3の補足説明
 - ・ 3.1 これまでのICT人材像はマネジメント系スキル及び技術的スキルが中級以上であったが実践的ICT人材像では課題を発見し、分野横断的な知識・スキルにより課題解決のためサービスやシステムなどを分析・デザイン具現化できる人材を目指している。（総務省）
 - ・ 実践的ICT人材の3類型がある。人材育成の方向性は小学生から大学、大学院、社会人まで一貫して取り組みオープンイノベーションを考える。その取り組み事例として①慶應義塾大学、②八戸大学などの紹介があった。これらの取り組みを國領先生に紹介いただく。国が考える「オープンイノベーションはICTを使いながら実践できる人材育成を進める」考え方は私情協の平仄ともあっている。
 - ・ 紹介された事例を基に実践例を通して大学にとって有益か討議する。型にはめず教材や、取組のオープン化をしていただき議論する。
 - ・ 15:10からのIPAの文書を訂正する。産学連携による実践的講座の評価結果を踏まえた実践力修得を評価する評価基準モデルの提案について紹介いただく。
 - ・ 3.2 評価基準活用ガイド（案）概要（文部科学省・経産省）
 - ・ 評価基準活用ガイド作成の意図として、文部科学省・経済産業省の産学人材育成パートナーシップを受けて ⇒ 産学連携実践的IT教育支援活動（2009）の展開と実践的講座構築ガイドの作成（2012）、評価基準の作成に着手（2012）⇒ 評価基準活用モデルと活用ガイドの作成（2013）と進めてきた。評価基準活用ガイドの構成説明した後、評価項目表（項目が多く運用面で課題あるのでループリクをあまり細かくしない方が良いとの意見を述べている）を参考に説明した。総務省も経産省も目指す方向は似ている。
- (2) 主な意見
- ・ プログラムではIPAの説明が最後になっているが、全体の流れから再考したほうが良い。⇒休憩の前に入れてさらっと説明する形に変更する。
 - ・ オープンイノベーションとはイノベーションしたものをオープン化する事ではないのか。ここでは横断的な異分野間、異業種間の力を活用してイノベーションを起こすことをイメージしている。
 - ・ 大学の事例紹介では慶應義塾大学の例は壮大すぎて参考になりにくく、規模の小さな大学にとっては八戸大学の方が身近で役立つと思う。八戸大学は現在八戸学院大学に変わっている。
 - ・ 國領先生のPPT資料は参考になる。
 - ・ 日立の評価基準で現場研修は大変参考になった。地方で地元の企業と地元の学生で評価基準をつくっている例が良かった。
 - ・ IPAは元々人材育成ではなく評価重視のスタンス。誤解を招かぬようしっかり調整を取る必要がある。
 - ・ コンピテンシー評価項目表でコミュニケーション力、問題発見・解決力、知識獲得力などの項目が多すぎて現実的に先生は評価できない。いきなりループリクを求められても現実的には難しい。私情協としてはシンプルにしないと活用できにくいと意見具申した。

4. 次回開催日程 12月16日（月） 午後1時半～3時半 アルカディア市ヶ谷にて